

戦後七十年の記事を読んで

水見市立十三中一年 上野 愛莉

私たちが毎日朝、昼、晩と三度のごはんを食べ、テレビを見たり笑ったり、友達と遊んだり、あたり前のように生活をおくっています。今年で原爆が投下されて七十年がたちました。

一九四十五年八月六日午前八時十五分、広島に人類史上初となる原子爆弾が投下され、市街は瞬く間に焼きつくされました。さらに

九日には長崎に二発目が落とされました。合計二十一人もの方が命をうばわれました。

水見市の人口が約四千人なので、いかに原爆の威力のすさまじかたかわかります。

原子爆弾は核分裂によって放出される巨大なエネルギーを利用して作られます。爆風で建物は破壊され、高温の熱線は火災をひきおこし、人の皮膚まで溶かすという、おそろしいものです。

この記事を読んで、当時の写真を見るだけ

で、こゆさが伝わります。しかし当時の人たちは、生きぬいた人も自ら命をたゞてしまつた人もいました。それは、やつとの思いで生きぬいたのにも、大切な人をなくし、次々と人が殺され、何も無く、ただいのる。こゆい、り形ではかできなかつたのです。生きぬくことと苦しむはすばらしい事なのに、生きることで苦しむ悲しみをせかつていたからです。

私は八月六日に生まれました。誕生日はめでたい日はあつたのに、こんなに重く、苦し

い日に生まれた事に、最初は悲しみを感ぜました。でもお母さんは逆に、「平和について考える、忘れてはいけない日だよ」と言われ、そうだと、忘れてはいけない日なのだと思ひました。私たちが次の世代へと伝えていき二度とこんな残酷な事をしてはいけな、平和の大切さを知つていかなければならないのです。では、当時実際に原爆を体験した貴重な話を聞いてください。

その人は爆心地から五百五十メートルとい

う一キロもないところでした。進徳高等女学校三年の当時十五歳の学徒動員で電話の交換業務中のことだそうです。建物の下じきとなり、顔に大けかを負って左目も失なってしまったのです。そのかたの家族のかたも命を失なわれた人がいました。身近にいた人をなくし、どんなに辛らかったでしょう。とれほと日本中が涙を流したでしょう。顔を三度手術し、終戦翌年に受けた手術で、自分の顔を見て、戦争が憎いと感じたそうです。

知れば知るほど戦争の重みを感じました。今でもなお、心に傷を負っている人はいます。戦後何年かたち、後で後遺症をばしよいてしま。た人もいます。戦争はみにくくたれも幸せになんかはなれません。戦争では何も解決しないのです。日本は戦争を経験したことで平和の大切さを学ぶことができました。このまま、世界全体が一つの輪となり、核兵器のないみんなが幸わせになれる理想の世界が実現できればいいと思います。